



発行: 墨田区(スポーツ・学習課)
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6309 FAX 03-5608-6934
✉sportsgakusyu@city.sumida.lg.jp



日本刀文化を、墨田から世界へ 刀剣博物館

■文化を伝える地・墨田への移転

古来より日本刀は武器として使
用されるだけでなく、権威の象徴
や信仰の対象として崇敬を集め、
また、刀身だけでなく刀装や刀装
具も含めて優れた美術工芸品とし
て鑑賞の対象となっていました。
こうした日本刀文化の普及と日本
刀の保護・公開、刀剣技術の伝承、
刀剣鑑賞の指導等のため、刀剣博
物館は1968(昭和43)年5月に
渋谷区代々木の地に開館しまし
た。

以来当館はおよそ半世紀に渡
り、我が国の日本刀文化発信の中
心地として同地に存在し愛刀家
の皆様を支えられてきました。し
かし、建物の老朽化のため改築が
必要となり、旧安田庭園内の両国
公会堂の跡地に新築・移転し、本
年1月より、墨田区横網の地にて
新博物館を開館しています。当館
を含めて30近い博物館が立ち並ぶ
一大文化都市である墨田区におい
て、鉄の芸術品である日本刀とい

う伝統文化を世界に発信してい
く拠点として存在感を発揮でき
ばと思います。

■地元との調和を目指して

現在当館が建っている所には、
2015年の夏まで両国公会堂が
存在していました。1926(大
正15)年の落成以来、公演やコ
ンサートなど様々なイベントを通じ
て多くの方々に活用されてしま
したが、老朽化のため閉館となりま
した。当館はこれまで建っていた
両国公会堂の佇まいを継承し、池
に向かって張り出した円筒部とそ
の両側に広がる翼部から構成され

ています。また、公会堂のドーム
に替わり頂部にはヴォールト屋根
が架けられ、高さを抑えて庭園と
の調和を図ったものとなっています。

また、1階の情報コーナーでは、
地域情報のほか、旧安田庭園や両
国公会堂についてのパネルや公
会堂の模型展示を行っています。

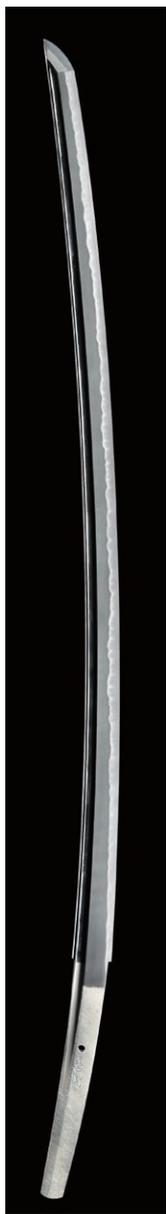
それ以外にも、各種会議の会場と
して場所を提供するユニークベ
ニユーの取組みにも協力してい
くことを予定しています。こうした
活動を通じて、かつての両国公会
堂のように地元をはじめ多くの
人に親しまれる存在を目指して
いきます。

■いにしへの技を現代に伝える

当館に来られるお客様は、刀剣
に長らく親しんでこられた方が中
心でした。しかし近年は、日本文
化に興味を持つて来日される海外
の方やゲームなどをきっかけに刀
剣に興味を持たれた女性など、多
様化が進んでいます。こうしたお
客様の多様化に合わせて、それぞ
れの興味関心に応えることができ
るよう、これまで以上に企画・展
示やイベントに力を入れていき

いと考えています。

本年1月19日より開館記念展示
として現代の刀職者の作品『今に
伝わるいにしへの技』展を開催し
ています。本展では、平成29年度
の新作名刀展において最高賞(高
松宮記念賞)に輝いた久保善博氏
の太刀や女性研師として初の特賞
(木屋賞)を獲得した神山貴恵氏



作品など、いにしへの伝統と技を
継承し研鑽を積み重ねてきた現代
名工の珠玉の作品を是非ご覧いた
だければ幸いです。
(刀剣博物館 荒川史人)

刀剣博物館 ご利用案内

【開館時間】 9:30~17:00 (入館は16:30まで)
 【休館日】 月曜日(祝日の場合開館、翌火曜日休館)
 【入館料】 大人1,000円、高校・大学・専門学校生700円、
 中学生以下無料(※特別展によって別料金あり)
 【所在地】 墨田区横網1-12-9 【電話】 03-6284-1000

展示情報

現代刀職展『今に伝わるいにしへの技』
 平成30年1月19日(金)~3月25日(日)(展示替え有り)

や かけ ゆみ お 矢掛弓雄と

「隅田川叢誌」(下)



1. 「頼朝橋鏝」隅田川神社所蔵

明治元年(1868)12月に隅田川神社に到着した矢掛弓雄は、実に多彩な資料を残した。自身が京都遊学中に作成した絵巻物や陵墓図の写本をはじめとして、来着直後から明治7年にかけて奉納し続けた絵馬、神道祭祀や諸儀礼を執行するために調えた道具、神主を兼務した周辺小社の縁起などが揃う。また、神社の経営にかかわって作られた帳簿も比較的よく残されている(『隅田川神社の文化財―矢掛弓雄の世界―』墨田区教育委員会発行)。隅田川神社には、矢掛ゆかりの品々がまとまったかたちで伝来したのである。

明治元年(1868)12月に隅田川神社に到着した矢掛弓雄は、実に多彩な資料を残した。自身が京都遊学中に作成した絵巻物や陵墓図の写本をはじめとして、来着直後から明治7年にかけて奉納し続けた絵馬、神道祭祀や諸儀礼を執行するために調えた道具、神主を兼務した周辺小社の縁起などが揃う。また、神社の経営にかかわって作られた帳簿も比較的よく残されている(『隅田川神社の文化財―矢掛弓雄の世界―』墨田区教育委員会発行)。隅田川神社には、矢掛ゆかりの品々がまとまったかたちで伝来したのである。

これらは既に江戸時代の人が真偽について疑いをもった可能性のあるイワクつきの品々だったが、矢掛は奉納を受け、以後これらを頼朝隅田川渡河の証拠として社宝指定したのであった。伝説をそのまま歴史とみる感覚が上回っていたことがわかる。今の私たちからみれば明らかに無茶だ。

だが、隅田村に移住した矢掛はいずれ「花もよし月雪もよしすみた川すめはすなはちミヤこなりけり」と詠むことになる(明治27年)。ここではまずこうした点から評価したい。元来からの来訪者がこのように郷土人の心性に近づくには、村人の心性をありのままに継ぎ受ける努力が必要だったと思われるからだ。彼は隅田村とその周辺に伝わる伝説や遺物、史跡の採集に努め、その成果を明治25年『隅田川叢誌』(写真2)にまとめて発表する。今の一首はまさにこうした時期に詠まれたものなのだ。

土地に根づくとはそもそもどういうことか、ということを考えさせるような素材が隅田川神社には伝わったように思われる。

ただし、矢掛による郷土史への接触には、西国出身知識人としての歴史意識や明治政府の政策と密

接な関わりを持ち始めた神職としての意識が関係した面もある。

たとえば、彼は隅田川神社のみならず、兼帯管理した三財稲荷や田中稲荷、若宮八幡、元関谷天満宮など周辺小社の縁起を書き残しており、その物語の作成には明らかに地域伝説を採録するという日頃の努力が活かされている。神職として地域諸社草創の物語を書き上げるには、地域の歴史に通じておく必要があったのだ。

また、これこそ核心部分だが、自著を出版の翌年に天皇に献上した事実が重要だ。地誌を王による領有の表現とみる古代以来の文化の影響だろうが、こう見るかぎり、彼はローカルな歴史を日本の王に献上したのだといえる。もつと想像を逞しくすれば、武家の棟梁に権威をみる傾向の強い東国の片隅で、西国の政治文化を身に帯びた矢掛は、天皇への献上を通じて東国の歴史の一片を国史に組み入れようとしたとも考えられる。

矢掛弓雄の遺品の中には、どうやら天皇を核とする国民国家「日本」の形成過程を教える重要な資料が含まれていたようだ。

(墨田区文化財保護指導員 中山 学)



『隅田川神社の文化財―矢掛弓雄の世界―』は、墨田区役所1階の情報コーナーにて販売しています。



2. 『隅田川叢誌』すみだ郷土文化資料館所蔵